

町田 康 ぎれぎれ



文藝春秋

町田康
まねざれ

きれぎれ

平成十二年七月十日 第一刷発行
平成十二年八月十日 第三刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者 町田 康まちだ こう

発行者 寺田 英視

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十二
郵便番号 102-8008

電話 (03) 3365-1221 (大代表)

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤 製本

© Kou Machida 2000

町田康（まちだ・こう）
1962年大阪府生まれ。高校時代より町田町蔵の名でバンド活動を始め、81年、パンクバンド「INU」の『メシ喰うな』でレコードデビュー。96年、『文学界』に処女小説『くっすん大黒』を発表。97年、『くっすん大黒』で野間文芸新人賞、ドウ・マゴ文学賞を受賞。著書に、小説集『屈辱ボンチ』『夫婦茶碗』『エッセイ集』『つるつるの壺』『へらへらばっちゃん』『耳をぎ饅頭』、写真小説『俺、南進して。』などがある。

万一、乱丁落丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

ISBN4-16-319330-8

Printed in Japan

目次

きれぎれ

5

人生の聖

106

装画 寺門孝之
装幀 関口聖司

きれぎれ

き
れ
ざ
れ

無数の大黒天吉祥天女が舞い踊っている。通りの両側に建つビルの窓から水が噴出し、沿道の群衆の発する歓声がひと固まりになって空中に高巻いて唸っている。ひだる神にとりつかれたようだ、花吹雪。吹き流し。そういえば以前、タクシーに乗って全日空ホテルから新・一の橋に向かって走行中、左側のビルの一階に巨大な女の顔があつて、僕の顔をじろとみて、なんとも言えぬ凶悪な顔をして、まあ、すぐにこの世のものでないということは分かったけれども、寝ていないし食っていないし、顔がどんどん膨張してあれくらいな感じになっている感じが先ほどからして気色が悪い。ぽんぽんと景気よく、御祝儀つて感して百貨店の屋上から人間が飛び降りてくる。巨大化した僕の顔が空中に君臨して、またひとり落ちていったのは妻。みんなと同じように、いきまーす、かなんかいつて主体性がない。白いブラウス、膝までの丈の赤い襪のあるスカートの、ふわっとした感じのなか

から黒い靴下に包まれた足がのぞいているのが猥褻だ。いちおうノリで、いきまゝす、とかいってはみたもののやはり怖いのか青ざめて二の腕に粟粒が生じている、でも、あっけなく、ぼーん、と飛んで妻は地面で断裂した。しかし、次から次へと引ききりなしに人が落ちてくるので群衆は別段驚きもしない。というより自分だって気が向けば紅白のんだんだらにペイントされたビルの入り口に走っていつて屋上まで駆けあがり、景気づけに飛び降りるつもりでいるのだから人が落ちてくると云うことに驚く訳がない。盛り上がるだけだし、かし妻はやはり愚だな、どうせ飛び降りるなら、群衆のそれなりの喝采を受けそうなタイミングを見はからって飛び降りればいいものをちょうど三越の角から電気妖精の先導する電気山車が見えたときに飛び降りたものだから、誰も妻の飛び降りる様、断裂する様を見ていなかった。孤独な死だ。鈍な女だ。なんでよりもってそんな愚な、鈍な女を妻にしてしまったのか。情けない。みつともない。と、鯉が滝登りをしている軸と枯葉の突っ込んである青磁の壺の置いてある床の間の前でヤキソバを食っている妻の顔を見た。

まったくもって不気味である。いつの間にかこんな見苦しいことになってしまったのであろうか。シュミーズ姿で正座のあぐく土下座をするように前屈し、垂れる髪の毛を左手で押さえ、眉根に皺を寄せ、口を皿に近づけて、ヤキソバを食べる女房の姿は、なんだかけ

だものようで、しかもそのヤキソバというのが、いろどりといい麵の盛り上がった感じといい、とても気味の悪いヤキソバで、絶対にどんなことがあってもこんなヤキソバは食べたくないと思う。

散らかり放題に散らかった家の中は薄暗い。六畳四畳半三畳に湯殿台所狭い庭。引き戸やら苦戸やら四つ目垣やら式台やら三和土やら、墮落したような日本建築だ。欄間に木彫りの植物・鳥獣。家の外も陰鬱な感じ。昔はもっと白かったのだろうなあ、いまは焦げ茶色。濡れ縁も色が流れて、つくばいに阿呆のような朱い縄。雑草のなかに際だつシュロ。そんな薄暗い陰鬱な家で醜怪なシュミーズ姿の女がげだものちみた様子でヤキソバを食っている。ここはランバブか。またランバブにでも行ってみるか。

あのとランバブは薄暗かった。最初から泥酔していた。泥酔したのは北田の、或いはアベのせい。コンクリート造りの自動車工場のようなところ、ワイン色のメルセデス・ベンツとドラム缶数本置いてあって、黄色と黒のんだらロープが二片を区切っていて、立入禁止のような具合だったというのに北田とよく知らない北田の友人、アベがなかでプロ・レスのようなことをしてふざけはじめて、俺は少し離れたところで風に吹かれ黙想していた。五分かそこいら。ふざけるふたりの姿がちらほら見えていたのが、やがて見えなく

なって、すぐにアベの悲鳴。行ってみると、深い矩形の穴。底に鉄のレールのようなものが二本敷いてあるコンクリートの穴に北田、落ちていた。おろおろするばかりで役に立たぬアベを叱咤して、ようよう北田を助け出し、歩けるか？ と訊くと、ふらふらして歩けないという。じゃあタクシーを拾おう、ということになって、緩やかにカーブした片側二車線の道路のところまでぐにゃぐにゃする北田を引っ張って、右から走ってくるタクシーを待ったのだけれども、タイミングが悪いというか、真ん中に俺、左に北田、右にアベという順番で並んでいた僕ら、つまりはアベが最初にタクシーを発見するわけで、しかしこのアベが鈍くさい。ちっともタクシーに反応しない。通り過ぎてしまっただけから、あとなどと気弱な声をあげている。だったらプロ・レスのようなことなどするなというのだ。となると、北田はぐにゃぐにゃになってしまっているし、俺が僕が主体となってタクシーを拾わねばならぬのだが、間が悪いというかなんというか、タクシーそれ自体はがんがんにやって来るのだけれども、既に客の乗っているタクシーばかりで空車がちっともやってこない、そのうちにも北田は蒟蒻のようにぶるぶる震えだし、大丈夫か？ などと訊いてみると、そんなときに限って空車のタクシーが目の前を通り過ぎる、俺はまったく腹が立った。だいたいにおいてアベが右側にいるのだから、やってくるタクシーに注意して、空車

がきたら手を挙げればいいのだ。にもかかわらずアベは、そうして俺が北田に大丈夫かと問うているとき、同じように左の北田の顔を覗き込んでいる、だからタクシーをやり過してしまふのであって、おまえはタクシーに集中しろ。と、俺はアベを叱った。しかし、やはりアベは頼りにならぬような気がしたので、自ら右の、車のやってくる方をぐんぐんに見ただけけれども、拍子の悪い、そうして俺が僕が見ているときに限って空車どころかタクシーそのものがやってこず、赤い、粘土をこね上げたような形のスポーツ・カーや巨大な高級車が、タクシーを早くつかまえたいという意欲が強いあまり、ともすれば車道にはみ出がちな我々に警笛と粉塵と邪魔だ退けあほという意味合いの一瞥を浴びせて走り去るばかり、その都度、俺はアベに腹が立つ。おまえがもつとちゃんとしていたらとつくにタクシーを拾えていたのだ。フロントガラス越しにぶつぶつの赤い文字で「空車」と書いてある車が走り去るのを見送るその気持ちのみつともなさ。トモナクテシャーネーヤ。と、アベを責めていてもしょうがない、今度こそ、と目を凝らしていると、次第に薄暗くなってきた道路の向こうに「空車」の文字が見えて、ここを先途と手をあげる、というのも妙だが、そんな感じで手を挙げ、やがて前に止まったのは、ああいうのはなんというのだろうか、ワゴンタクシーとでもいうのだろうか、巨大な八人とかそんなくらい乗れるタクシー

で、乗り込むのが躊躇された。というのは、北田はくにかくにやだし、アベはこのとおり不甲斐ない。となると料金を支払うのは俺だ僕だ。それはまあ仕方がないとしてもこの巨大なタクシーはとうぜんその巨大な分、通常のタクシーより料金が高いのではないだろうか。俺はそこまでしなきゃなんねえのであろうか。別に北田を穴に落としたのは俺ではないのだけれども。と思ったからである。バルザックのラビューズという小説にオシヨンさんという人が出てくるが、この人はとても吝嗇で客人が来るのを嫌った。俺はオシヨンの心が分かった。気持ちだ。で、タクシーに、やっぱいいです、と云っていかせた。しかしちょっと心が咎めて、北田に、大丈夫だよな。いまのちょっと高価そうだったし。と話しかけると、北田はうんうんという風に頷くので、大丈夫だよ。こいつも空車だらけだし、と、云ったその瞬間、また一台、空車が目の前を走り去った。まったくアベはなにをやっているのだ、と思ったら、また、俺と北田の会話に相槌を打ったりしている。おまえはタクシーに集中しろと云ってるだろう、と俺の腹はもうどんどん立っていつて、それから空車は全然来ず、とうとう極限まで腹が立ったのとなんだかタクシーに馬鹿にされているような屈辱的な気持ちになったので勝手にしろと云ってひとりで家に帰ったら、翌日になって北田が死んだ、という電話が入って、それから通夜葬式。線香の匂いと読経のなか

で、はつきりいって北田を穴に投げ飛ばしたのはアベであって俺ではない、なのにみんなんだ、俺が殺したとでも言いたげな顔で、帰ったんだって、先に帰ったんだって、と、口々に云う。アベに云えよ。アベによ。と思つたけれども、どっかで小さくなっているのだろうか、アベの姿は見えない、北田の家は青果市場の関係だから仲買人も多くいて、そういう人も俺の方をじろじろ見る。きまりが悪くつてしょうがないから、酒をがぶがぶ飲むと、そういう仲買人の顔がちらちら青や赤に点滅し始め、その後ろに猫のような、北田のおばあさんとお姉さんの顔がちらほらしてこつちを向いて真つ赤な長い舌を出して鼻を嘗めたりする、その様を見ているうち、出し抜けに耳元で、「やはり北大に行かせたのが間違いだつたのでしょいか」と呟く声がして驚いて振り返ると、北田のお母さんが井鉢に山盛りになつた煮染めを掲げてしょんぼり立っていて、は？ 北大ですか？ 北田は北大に行つたのですか？ と問うたのだけれども、それには答えず、供養になりますので、といつて井をぐんぐん押しつけてきたりするものだから居たたまれなくなつて北田の家を出てそれからひとりで精進落として古町のランパブに行つた。そこで僕は妻と出会つた。

プラスチックの造り花と万国旗が天井を這わせてあつた。いたるところに、きらきら光

るピンクの紗のような巾が垂れ下がっていた。光が揺曳していた。福助の恰好をした小人の黒服がふたり、よちよち走ってきてなにかいうのだけれども世俗カンタータが大音響で流れていてなにをいつているのか全然わからない、とにかく外套を預け、福助の案内する席に座ると、白い下着姿で頭が馬の女と黒い下着姿で頭が牛の女が両脇に、正面にはなんだか分からない、悪鬼のような恰好をした女が三人、これも下着姿のが座って、まるで俺は包囲されたよう、女達は口々に、わあぎやあ喚いてるのだけれども世俗カンタータが五月蠅くてなにをいつているのかちっとも判然としない、隣の牛の頭の耳元で、「これはいったいなんの騒ぎだ」と怒鳴ると、牛はしわがれた声で、「節分お化け大会よ」と怒鳴り、エーイと奇声を発し俺の膝の上に乗り、鼻先に乳を押しつけてくる。そうこうするうちに三鞭酒が運ばれ、俺も護謨でできた乳と金髪の髻を装着され、かんぱーい、かんぱーい。かんぱーい。と三度いつてから、えーい。とまた例の奇声。いたるところに紗のような巾がさげであるうえ、明かりも、緑の水に泡が膨れたのやらを幻灯のように写していたり、なにもなくても紫やら赤やらの幕を通すから、牛や馬や悪鬼の顔が光に隈取られて淫靡、多分、僕の顔もあんなだろうと思いつつ、牛頭の乳を除けて三鞭酒をがぶがぶ飲むうち、頭の中身が膨張してなんだか胸が締めつけられるような叫びだしたいような具合にな